

研修会のお知らせ
17ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成28年2月1日発行

2016.2
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

2号

第38巻
No.319



アラビアコーヒーノキ *Coffea arabica* L. (アカネ科 *Rubiaceae*)

生薬 コーヒー豆 赤熟果実を採取し、2～3週間天日乾燥し、脱穀機で果肉皮や銀皮と呼ばれる内皮を除き、焙煎する。

成分 caffeine, caffeic acid, chlorogenic acid, niacin, trigonelline 等。

効能 現在は嗜好飲料として飲まれています。含有成分の caffeine は興奮作用、心筋収縮増強作用、平滑筋弛緩作用、利尿作用などがあります。

生薬 アラビアコーヒーノキ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



お茶と共に現在飲用されている代表的な嗜好飲料のひとつです。どちらもカフェインを含有し、薬として用いたのが始まりのようです。お茶の歴史が紀元前から始まるのに対し、コーヒーの場合それよりも遅く、6世紀頃の話としてエチオピアのヤギ飼いかレディが発見したという伝説に始まります。今でもエチオピアのアビシニア高原地帯では野生の原木を見ることができることからエチオピア原産説の元になっている話とされます。9世紀にはアラビアの医師アル・ラーズイーの書物にコーヒー豆を示す「バン」とその煮汁「バンカム」の記述があり、薬として飲まれていたことが記されています。13世紀にはイエメンのモカのイスラム教徒シェーク・オマルが山中で赤い実を発見し、持ち帰ったと伝えられていますが、実際には15世紀になってイエメンのアデンの聖者シーク・ゲマレディンがアビシニアを旅したとき、コーヒーの効用を知り、眠気覚ましとして勧めたことから修道者の間で広まったと言われ、コーヒーの木もイエメンに移植されたと伝えられています。はじめはイスラム寺院の秘薬としてメッカやメディナのイスラム世界に広がり、エジプト、イラン、トルコに広がっていきました。1554年にはコンスタンチノーブルに世界初のコーヒーハウスが開店し、広く一般に飲まれる飲料になったと言われています。

ヨーロッパに普及するようになったのは17世紀になってから、覚醒作用のある飲み物として広がっていったようです。1652年にロンドンに初めてのコーヒーハウスが開業し、次いでフランス、ドイツに伝わり、その他の地域もほぼ同時期の17～18世紀には伝わっていきました。アメリカには17世紀後半にイギリスから伝わりましたが、まだ紅茶が好まれている時代であり普及しなかったようです。ボストン茶会事件などで紅茶の輸入が少なくなり、独立戦争（1775～83）後は反比例するように南米産などの安いコーヒーが流入したことから、嗜好飲料の主流になりました。日本においては18世紀に長崎の出島に持ち込んだと言われていますが、あまり馴染みがなく、1913年に安価なコーヒーを提供するカフェパウリストが開業されて大衆に広がりました。しかし、コーヒー店などで飲まれるにとどまり、家庭で飲まれるようになったのは、1960年にインスタントコーヒーが発売されてからになります。

現在コーヒー栽培の主流のアラビアコーヒーノキは赤道を挟んだ南北回帰線の間の60カ国に及んでいます。平均気温が約20℃、年間雨量が1,500～2,000mm、水はけが良く、一日の気温の差が大きい高地を好み、主な主産地は中南米やアフリカ、アジアなどです。コーヒー栽培は限られた地域のイエメンで栽培されていましたが、17世紀にインドに伝わり、オランダ商人の手によりスラウェシ島、セイロン島、ジャワ島へと広がっていきました。18世紀にはその中の一本の木がオランダ、パリ経由で南米に渡り、後のブラジルでの栽培につながりました。大きく広がったコーヒー栽培でしたが、1861年にアフリカ中・東部で発生したさび病が世界に多大な被害を与えたため、現在ではさび病に強く、暑さにも強いが、味、香り共に劣るコンゴ原産のコンゴコーヒーノキ（*C. robusta* ロブスタ種）の栽培が東南アジアを中心に増え、全生産量の35%前後にもなっています。

（村上守一 記）